

「とはすがたり」と「源氏物語」

——中世における「源氏」撰取のあり方——

福 田 秀 一

日記文学の異色として近年注目を浴びてゐる「とはすがたり」は、多くの先行作品の影響を受けてゐるが、その中でも「源氏物語」の影響は著しい。そのことは、本作を一読して明白と思ふが、まだその具体的な報告も、注釈書の注解を除き、出されてゐないやうであり、かつ従来出た注

釈三書（富倉氏訳注本・呉竹同文会『全釈』・次田氏朝日古典本）の指摘に漏れてゐるものもあるし、進んでその影響・撰取の意味の追究に至っては、手がつけられてゐないやうである。筆者は、先般機会を得て本作における「源氏」の影響の現れ方を概観し、併せてその意味についても

一考を試みた（「中世文学への影響」、『解釈と鑑賞』昭四三・五「源泉と影響とから見る源氏物語の魅力」特集）が、その際紙幅の都合で両者の影響を具体的に網羅し指摘することを省いたので、こゝに先づその対比を列挙して先般の考察の論拠を補ひ、かつ前稿で本作を例として簡単に考察した中世文学における「源氏」の撰取の姿についても、再び考へてみたい。

二

前稿に記した通り、筆者の調べ数へた限り、「とはすがたり」が「源氏物語」から何らかの影響を受けてゐると見られるところは、（文章段落の一まとまりを一箇所とし

て)四十箇所、これを「源氏」の方に戻すと五十余箇所に上る。(前稿に述べた数より増えてゐるのは、以後の調査で、いくつか新たに気づいたためである。)前者は、朝日古典の頁にして、平均七頁に一箇所以上の割である。次にそれらを順に挙げ、それら「源氏」との対比やその撰取の意味につき、簡単につけ加へておく。「とはすがたり」の引用には朝日古典の頁数を付記するが、本文は私意をもつて訓んだ。

〔卷一〕

(1)御車さし寄せたるに、折知り顔なる鳥の音も、しきりにおどろかし顔なるに、観音堂の鐘の音、たゞわが袖に響く心地して、「左右にも」とはかゝることをやなど思ふに、なほ出でやり給はで、「一人行かん道の御送りも」などいざなひ給ふも、「心も知らで」など思ふべき御事にてはなけれども、思ひ乱れて立ちたるに、くまなかりつる有明の影、白むほどになり行けば、「あな心苦しのやうや」とて引き寄せ給ひて、御車引き出でぬれば、……昔物語めきて、何となり行くにかと覚えて、……(一九八頁)

これは、院に初めて愛を受け、「形は世々に變るとも、……」といふ誓ひを聞いた後、御所へ帰る院にせがまれて同車して里を出るところであるが、「源氏」の

(a)憂しとのみひとへに物は思ほへで左右にも濡る、袖かな(須磨、流謫中の源氏の心境)

(b)山の端の心も知らで行く月はうはの空にて影や絶えなむ(夕顔、源氏に連れ出される夕顔の不安な心境)

の二首を引歌にしてゐる。共に人口に膾炙した歌で、作者の口をついて出たものであらうが、この二首特に後者によつて、作者の今後の不安や悩みを暗示してゐるのであらう。効果的な伏線の引歌と言へる。そして恐らく、「観音堂の鐘の音……」は「須磨」の右の歌の直前に道真の故事を思ひ合せてゐることや「波たゞこゝもとに……」の文とも關係があらうし、(c)「くまなかりつる有明の影」は「帯木」の「月は有明にて……」を意識してゐるのであらう。「昔物語めきて」といふのは作者の態度として興味深いが、こゝでは以上のやうなことを指すものと思ふ。

(2)「程なき袖をわれのみこそ。まことの道の障りなく」など細やかに仰せありて、……(二二三頁)

作者の父の臨終に院が見舞に幸して、感激した父が泣く泣く作者への心残りを奏した際の、院の返事であるが、

涙をも程なき袖にせきかねていかに別れをとゞむべき身ぞ（浮舟、匂宮と契ってしまった翌朝、帰る宮の歌に答へた浮舟の歌）

を引いてゐる。尤も、こゝは「我のみこそ」とあるから、単に後朝の別れを生死の別れに取りなしたと見るべきで、父が作者の将来を浮舟に比したといふわけではあるまい。しかし、作者からすれば、この後の男性遍歴とそこに生じた生への不安（裏返せば執着）は、浮舟に一脈通ずるものもあるわけであらう。

(3) 「御墓へ参り侍る。御ことづけや。」（二二八頁）

作者の父の葬送の後、乳人の仲綱が作者に言ひかける語とされてゐるが、「須磨」の初めに、源氏が桐壺院の陵に詣でる際、藤壺に、「御山に参り侍るを、御ことづけや。」と言ふのを取って、こゝに適用したものである。

(4) 「日を隔てずも申したきに、御所の御使など見合ひつゝ、『頃とも知らで』とやおぼされんと、心の外なる日

数積る」など言はるゝに、……（二二二〜二三頁）

乳母の家に下つてゐる作者に届けられた、雪の曙からの文である。こゝは、

波越ゆる頃とも知らで末の松待つらんとのみ思ひける

かな（浮舟、彼女の愛心をなじった薫の歌）

を効歌的に引いてゐる。浮舟的存在は中世の物語によく形象されるところであるが、こゝでも作者は、（勿論、曙の歌といふ素材をもつてであるが）自身を或る程度浮舟的に造型してゐると言へよう。

(5) ……さまぐのことども聞ゆる有様は、夕顔の宿りに踏みとゞるかしけん唐臼の音をこそ聞かめと覚えて、いと口惜し。（二二六頁）

(4)に続いて、乳母の家で曙と密会した第二夜の情景である。(1)と併せ見ると、作者は時折自身のはかない生き方を夕顔のそれにも比してゐることが明白である。ついでに言へば、右の引用の少し前に、乳母が、「秋の夜長く待る。弾茶^bなどして遊ばせ侍らんと御父申す。……。」と言ひ、「継子・実の子が名乗り言ひ続け、九献の式行ふべきこと

いしく、伊予の湯桁とかや教へるたるも悲しきに……」
とあるところは、本文に問題もあるが、「空蟬」の冒頭の
一場面も影響してゐるであらう。

(6) 「六位宿世とかや咎められん」(二二七頁)

右に続いて、作者の許に曙が密かに通ふのを、院に発覚
して咎められはしないかと、乳母が案じた語で、

「……めでたくとも、物の初めの六位宿世よ」(少
女、夕霧の六位風情なのを乳母が軽蔑した語)

を受けてゐる。ここでは曙では六位ではない(権大納言正
二位)が、乳母は相手を誰とも知らず言つてゐるのであつ
て、ふとしたことばに「源氏」の一句が出る乳母(乃至は
作者)の精通を、当代の一般的傾向と見るべきであらう。

(7) 明けぬれば文あり。「今朝の有明の名残は、わがまだ
知らぬ心地して」などあれば、……(二三二頁)

醍醐に隠れてゐた作者を訪ねて、院が忍んで幸した翌
朝、院から届けられた後朝の文であるが、源氏が夕顔を連
れ出す月夜に、

いにしへもかくやは人のまどひけんわがまだ知らぬし
の、めの道(夕顔)
と詠んだ歌を引いてゐるのであらう。

(8) あいなく言ひならはしたる師走の月をしるべに、又思
ひ立ちて、……(二三六頁)

又も曙が訪ねて来た折の描写で、師走の月の形容は「枕
草子」(すさまじきもの)にも見えるが、「源氏」にも二
箇所、一つは「謹」に記された源氏の語、もう一つは

世の人のすさまじきことに言ふなる師走の月夜の、曇
りなくさし出でたるを、……(総角)

がある。(6)と同じく、主題や構想に關する影響ではない
が、表現の面における「源氏」の支配力の大きさを知るこ
とはできる。

(9) ……深き鐘の聞ゆる程にや、あまりに耐へがたくや、
起き上るに、「いでや、腰とかやを抱くなるに、さやう
のことがなき故に、とゞこほるか。いかに耐ふべきこと
ぞ」とて、かき起さるゝ袖にとりつきて、ことなく生れ
給ひぬ。先づ、「あな嬉し」とて、……(二四二頁)

文永十一年（作者十七才）の九月、曙との間にできた子を秘密に出産するところであるが、「源氏」（葵）で葵上が夕霧を産する部分の終近く、

少し御声（注、六条御息所の生霊の）も静まり給へれば、「ひまおはするにや」とて、宮（注、大宮）の御湯

もて寄せ給へるに、かき起され給ひて、程なく生れ給ひぬ。「嬉し」とおぼすこと限りなきに、……

を踏まへてゐると思はれる。つまり作者は、自己の体験・回想を記すに当って、しばしば先行作品とりわけ「源氏」に類似の場面を求め、その表現を借りてゐるのである。

(10)……女院の御方様は何とやらん、犯せる罪はそれとなければ、さしてその節といふことはなければ、御入立も放たれ、御簡も削られなどしぬれば、いとゞ世の中物憂けれども、……（二四五頁）

卷一の終近く、東二条院の不興を蒙ったところであるが、無実を唱へて嫌疑の晴れることを祈った源氏の歌

八百よろづ神もあはれと思ふらん犯せる罪のそれとなければ（須磨）

を引き、表現を飾つてゐると認められる。

(11) 斎宮は二十に余り給ふ。ねびとゝのひたる御様、……花と言はば桜にたとへてもよそ目はいかゞと誤たれ、霞の袖を重ねるひまも、いかにせましと思ひぬべき御有様なれば、……（二四九頁）

例の、「増鏡」（草枕）にも取られて有名な前斎宮の描写であるが、野分の翌朝に夕霧が垣間見た紫上の美貌の描写、

……気高く清らに、さと匂ふ心地して、春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを、見る心地す。（野分）

を踏まへてゐると、次田氏（朝日古典頭注）は言つてをられる。字句の上からは必ずしもさうと断定できないが、後者が「源氏」の中でもよく引かれる箇所であることは事実である。

〔卷 二〕

(12) 「朱雀院の行幸には、主の座を対座にこそなされしに、今日の出御には御座おるさるゝ、異様に侍る。」（二七〇頁）

後深草・龜山兩院の仲がよくないとの関東の推測を打消すべく、後深草院の御所に龜山院を招いて蹴鞠の会を催した時、後深草院が故後嵯峨院の遺志に反して座を対等にしておいたところ、龜山院が父院の語を守らうと座を下に移した折に、後深草院の言った語で、「源氏」(藤裏葉)で朱雀院と冷泉帝とが源氏の六条院を訪ねた折、源氏の座だけを下げてあつたのを、宣旨によって改めさせた記述を受けてゐる。これも、院の語とすれば、直接には作者の構想力の外にある如くであるが、こゝにその語を記すといふ選択は、やはり作者が間接には「源氏」にモチーフを負つてゐることになる。

(13) 「仏の御しるべは、暗き道に入りても」など仰せられて、……(二七三頁)

後深草院の延命供の折、思ひがけず再会した有明の月が、作者に迫る折の語で、

「仏の御しるべは、暗きに入りても、さらにたがふまじかなるものを」(若紫、源氏が紫上に寄せる心を尼君に訴へるべく、女房に言ひかけた語)

を受けてゐる。有明の語として記されてゐる点には、(12)と

同様のことが言へる。

(14) 裏表うらおもてに小さき洲流しをして、中纏ちゆうぢんなる紙に水を描きて、異物は何もなく、水の上に白き泥でいにて、「くゆる煙よ」とばかり書きたる扇紙を、……(二七六頁)

いはゆる「扇の女」の段の初めの文であるが、この扇紙の一句も、「源氏」の、

浦にたくあまだにつゝ、む恋なればくゆる煙くゆるよ行く方ぞなき(須磨、源氏の消息に対する朧月夜の返事の中の歌)

から出てゐる。一見作者の構想以前の影響であること、(12)・(13)と同様である。

(15) 百歩ひゃくほの外といふ程なる御匂ごにおいひ、御屏風ごびんぷうのこなたまで、いとこちたし。(二七八頁)

(14)の後、「扇の女」を召した後深草院が、彼女を待たせた室に入るところの描写の一節であるが、こゝは

遠く隔りたる程の追風も、まことに百歩の外も薫りぬべき心地しける。(匂宮、薫の描写)

を受けてゐるに違ひない。

(16) ……御返事はなくて、「浅茅が末にまどふさゝがに」
と書きたる硯の蓋に、縹の薄様に包みたる物ばかり据ゑ
て参る。御覽ぜらるれば、「君にぞまどふ」と、だみた
る薄様に、髪をいさゝか切り包みて、……(二八〇頁)

扇の女との情事の折、雨の中を空しく待たされた傾城の
歎きを聞いた院が、慰めの文をやったところ、傾城のよこ
した返事のさまである。(a)「浅茅が末に」の方は、恐ら
く、

風吹けば先づぞ乱るゝ色変る浅茅が露にかゝるさゝが
に(賢木、雲林院に籠った源氏から紫上に宛てた文に
対する紫上の返歌で、源氏の移り気を案じたもの)
を、(b)「君にぞまどふ」の方は、明かに、

峯の雪汀の氷踏み分けて君にぞまどふ道はまどはず
(浮舟、雪の日宇治を訪ねて浮舟と語らった匂宮の歌)
を引いてゐる。傾城が心の表出に用ゐた引歌ではあるが、
作者も共鳴してゐることは否めない。敢へて言へば、作者
はこゝでも生への不安を仄かしてゐるのであらう。

(17)「竜頭鷓首の舟を作りて、水瓶を持たせて、春待つ宿
の返しにてや」と御気色あるを、……(二八六頁)

亀山院との小弓の遊びに負けた院が、負態として提案す
る語であるが、「源氏」で、前年の秋、秋好中宮から「心
から春待つ園はわが宿の紅葉を風のつてにても見よ」(少
女)と挑まれた紫上が、春を迎へて返事をすべく、竜頭鷓
首の舟を浮べて遊ぶところ(胡蝶)を、念頭に置いてゐ
る。(12・13)などと同様に、院の口を借りてモチーフを「源
氏」に負ひ、回想記の中に物語的色彩を添へる構想と見ら
れる。

(18)左の袖に沈の岩をつけて白き糸にして滝を落し、右に
桜を結びつけてひしと散らす。袴には岩井堰などして、
花をひしと散らす。「涙催す滝の音かな」の心なるべ
し。(二八七頁)

右の負態の折の、西園寺大納言(実兼)雪の曙)の出入
ちで、よく引かれる

吹き迷ふ深山嵐に夢さめて涙催す滝の音かな(若紫、
暁の勤行にまじる山嵐と滝の音とを聞いた源氏の歌)
の歌を取ったもの。こゝでも、直接には当時の宮廷貴族に

滲透してゐる「源氏」の姿、特にそれが(17)などと同じく雅びの象徴乃至は典型として意識されてゐることに注意したい。

(19)さるほどに、御妬みには御勝ちあり。なほ名残惜しとて、いや妬みまで遊ばして、又この御所御負け。伏見殿にてあるべしとて、六条院の女樂をまねばる。(二八九頁)

前条の後日譚で、以下、「紫上には東の御方、女三宮の琴の代りに箏の琴を」とあり、作者にも「明石上にて、琵琶に参るべし」との命が下る。こゝで院が再度の負態に「六条院の女樂」(若菜下)を模したといふのも、事情は(17)・(18)と同じで、作者の構想以前に、宮廷での「源氏」傾倒を示すものである。しかしながら、繰返す通り、それだけに、当時の文化に対する「源氏」の影響が知られるばかりでなく、この行事を生き／＼と描写する作者の筆には、一面において宮廷女房の日記の伝統を受ける本作の主題や構想が、「源氏」によって支へられてゐる点の多いことが窺はれる。

(20)とかく泣きさまだれゐたれども、酔ひ心地やたゞならざりけん、つひに明け行く程に帰し給ひぬ。(三二二頁)

筒井御所で近衛大殿に強要された折のことを回想したところで、細殿で臘月夜を捉へた源氏を叙した「酔ひ心地や例ならざりけん」(花宴)を踏まへてゐる。「花宴」のこの部分、特にこの直後に臘月夜が名を問はれて答へる歌「うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば訪はじと思ふ」は、中世によく引かれたものである。

(21) (a)「紙燭さした賜へ。むつかしき虫などやうのものもあきらん。」(三二三頁)

前条の翌晩、大殿が再び作者を借受けたいと暗に院に頼む口実の語で、次田氏(朝日古典頭注)は、「夕顔」の源氏の語、「紙燭さして参れ。……」及び「荒れたるところは、狐などやうのもの、人おびやかさんとて気恐ろしう思はずらん。……」を踏まへてゐるとしてをられるやうである。氏は「むし」を「むじな」と改めてをられ、その点にも問題があるし、単なる類似とも考へられるが、一応挙げておく。原文が余りに有名な箇所だけに、モチーフや表

現に無意識の影響が現れることもあり得よう。

なほ、これに続いて大殿が

(b)「かゝる老いのひがみは、おぼし許してんや。いかにぞや見ゆることも、御めのとになり侍らん古き例も多たふしく」(三二二頁)

と言ふのを、同じく次田氏は、「源氏と女三宮との關係などを指すか」と軽く推測してをられるが、或いは作者の意識の中に、「源氏」の構想も多少はあつたかも知れない。

〔卷三〕

②世の中いとわづらはしきやうになり行くにつけても、

……(三二四頁)

卷三の冒頭で、「源氏」の、

世の中いとわづらはしく、はしたなきことのみまされば、……(須磨、冒頭)

を受けてゐるに違ひない。と言ふのは、「須磨」が古來愛誦されて人口に膾炙してゐたといふばかりでなく、以下に挙げるやうに、卷三には「須磨」に依つた文句がいくつもあり、それは結局作者が或る程度「須磨」における源氏に自らをよそへてゐると見られるからである。作者はこの卷

の終近く、御所を退出せざるを得ない憂き目を見るのであつて、さういふ構想(虚構ではない)に、「源氏」を借りて来てゐるとも見られるのである。

③「……さても今宵不思議なる夢をこそ見つれ。……今宵必ずするしあることあるらんと覺ゆるぞ。もしさもあらば、疑ふところなき岩根の松をこそ」(三二二頁)

有明との密会を黙認してゐる院が、夢の兆によつて、作者にその懷妊を予言するところで、

誰が世にか種は蒔きしと人問はばいかゞ岩根の松は答へん(柏木、源氏が女三宮に言ひかけた歌)

を引いてをり、その意図も明白である。

④「……深く思ひそめぬるさまも、げにあはれに覺えるぞ」など御物語あるを聞くにも、「左右にも」とは、かゝることをや言はましと、涙は先づこぼれつ。(三二七頁)

院が有明の陳謝を聞入れた旨、作者に語るところであるが、(1)にも引いた「須磨」の歌を引いてゐる。作者が、自

分の生の不安や身の去就に迷ふ時、好んで口にする歌であったと考へられる。つまり、心理描写のために用ゐた引歌である。

(25) ……法輪に籠りて侍れば、嵐の山の紅葉も憂き世を払ふ風に誘はれて、大井川の瀬に波寄る錦と覚ゆるにも、
うらやましくも返る波がなと覚ゆるに、^a たゞこゝもとに
^c 鳴く鹿の音は、誰が諸声にかと悲しくて、……(三三一頁)

嵯峨の継母の許に行った折、かつてこの地で公事に奉仕したことを回想した部分であるが、(a)「うらやましくも…」は、「伊勢物語」を踏まへてゐる一方、須磨に着いた源氏が「うらやましくも」と口ずさむこと(須磨)とも、無関係ではあるまい。続く(b)「たゞこゝもとに」の句は、勿論「須磨」の有名な一文から来てゐると思ふ。そして、(c)「誰が諸声にか」の件りは、恐らく、

涙のみ霧りふたがれる山里は籬に鹿ぞ諸声に鳴く(権本、八宮の死後、大君を見舞った匂宮の歌への、大君の返歌)

を取ってゐるのであらう。つまり作者は、頼り少い自身の

境遇を、こゝでも須磨の源氏や宇治の大君に擬してゐるのであるが、それは単なる表現上の対比や比喩ではなく、作者の人生そのものを「源氏」の作中人物によって構想するといふ、毎度定まりの手法を用ゐるのである。言ひかへれば、自照文学である本作が、主題や構想において、虚構の物語であつた「源氏」に規制されてゐるのである。

(26) 御そばにて候はんずれば、過ち候はじ。女三の御方をだに御許されあるに、なぞしもこれに限り候べき。……(三三五頁)

前条に続いて、大井の御所に召された作者が、両院の傍に臥すことになり、龜山院が後深草院に作者を要求する語と解される。前出(12)・(13)や(17)・(19)と同様なケースである。

(27) 明け方近くなれば、……はじめておどろき給ひぬる。「御寐ぎたなさに、御添臥も逃げにけり」など申させ給へば、「只今までこゝに侍りつ」など申さるゝも、なか／＼恐ろしけれど、犯せる罪もそれとなければ、頼みをかけて侍るに、(三三六頁)

前条の翌朝の件りであるが、(10)にも引かれた「源氏」(須磨)の歌を引いてゐる。

(28)……唐綾・紫村濃、十づゝを五十四帖の草子に作りて、源氏の名を書きて賜びたり。(三三七頁)

右の後、龜山院から作者に下された被物である。これは素材の段階で、当時における「源氏」の享受ではあつても、本作における影響ではないが、(12)・(13)・(17)・(18)・(19)などと並べて見ることもできるので、参考までに挙げておく。

(29)程近き所に御愛悌する稚兒の許へ入らせ給ひて、それがなさは、やうく天の下の扱ひぐさになると聞くもあさましけれど、……(三三八頁)

引用で分るやうに、有明の行状についての作者の評であるが、恐らく共に有名な、

(a)光源氏、名のみことくしう、……忍び給ひける隠ろへごとをさへ伝へけん人の物言ひさがなさよ。(帚木、

冒頭)

(b)……やうく天の下にも味気なう、人のもて悩みぐさになりて、(桐壺、冒頭近く)

の二箇所を踏まへてゐるであらう。発想の型を「源氏」に負った例である。なほ、(c)「人の物言ひさがなさ」の句は、卷一(二〇〇頁)にも見える。

(30)「……さてその名は、少し人の物言ひぐさも静まらぬずる。……」とて、明け行く鳥の声におどろかされて帰り給ひぬるも、浅からぬ御志は嬉しきものから、昔物語めきて、よそに聞かん契りも憂かりし節の只にてもなくて、度重なる契りも悲しく思ひゐたるに、いつしか文あり。「今宵の仕儀は珍らかなりつるも、忘れがたくて」と細やかにて、

荒れにける葎の宿の板庇さすが離れぬ心地こそすれとあるも、いつまでと心細くて、

あはれとて訪はるゝこともいつまでと思へば悲し庭の蓬生(三三九〜四〇頁)

前条の後、有明との關係を続けてゐた作者のところへ、或る夜突然院が忍んで訪れ、近く生れる予定の有明の子の

処置など指示して帰り、直ちに文をよこすところであるが、『全釈』は (b)「葎の宿」、(c)「庭の蓬生」の語句や、文を携へた院の使が訪ねて来る点で、「源氏」(桐壺)の有名な、鞍負命婦が亡き更衣の母を訪ねる件りと似てゐるとしてをり、「昔物語めきて」をも、さうした立場で解してゐる。しかしながら、使の前に院自身が忍んで来たことなど「源氏」と大分違ふし、荒れた住まひを「葎の宿」や「蓬生」と形容することは極めて普通のことであり、かつ「昔物語めきて」も、次田氏(朝日古典頭注)の言はれる通り、こゝは生れて来る子の処置について苦慮することを言つてゐると見るべきであらうから、結論的には、こゝは「源氏」の影響とは考へない。(a)「人の物言ひぐさ」も、前条に引いた部分を受けてゐるとも考へられるが、断定は憚られる。

(31)「……世の習ひ、いかにもならば、空しき空に立ちのぼらん煙も、なほあたりは去らじ。」(二四三頁)

最後の逢ふ瀬に、有明の言つた語の一節であるが、「源氏」の

行方なき空の煙となりぬも思ふあたりを立ち離れじ

(柏木、柏木の臨終の床を見舞つた女三宮の歌に対する柏木の返歌)

に依つてゐることは、以下の条から疑ひない。

(32)「この世にて対面ありしを、限りとも思はざりしに、見しむば玉の夢も、いかなることにか」と書きて、奥に、

身はかくて思ひ消えなん煙^aだにそなたの空になびきだにせば

とあるを見る心地、いかでおろかならん。げに、ありし瞬を限りにやと思ふも悲しければ、

思ひ消えん煙^aの末をそれとだにながらへばこそ跡をだに見め(三四四頁)

臨終の有明からの文とそれへの返歌であるが、前条と同じく、

(a)「見し夢を心一つに思ひ合せて、又語る人もなきが、いみじういぶせくあるかな。」

と歎き、煙によそへて二世の縁を願つた、臨終の柏木と女三宮との贈答(柏木)や、(b)その少し前の柏木から女三宮へ贈つた歌、

今はとて燃えん煙もむすぼほれ絶えぬ思ひのなほや残らん(同)

などを受けてゐる。このやうに、作者が時に自身を女三宮に擬してゐる、詳しく云へば、院と有明との三角關係を、源氏と女三宮と柏木とのそれに比してゐることは、(23)にも見られたことで、後出(34)も同様である。

(33)……今宵しも村雨うちそゞぎて、雲の気色さへたどならねば、なべては雲井もあはれに悲し。(三四五頁)

前条に続き、つひに有明の死を聞いた時の歎きの一節であるが、源氏が葵上の死を悼む条(葵)に、

(b)……空の気色もあはれ少からぬに、……空のみながめられ給ひて、

(c) のぼりぬる煙はそれとわかねどもなべて雲井のあはれなるかな

及び

(a)時雨うちして、ものあはれなる暮つ方、……風あらゝかに吹き、時雨さとしたる程、涙も争ふ心地して、

「雨となり雲とやなりにけん、今は知らず」とうちひとりごちて、……

とあるのを踏まへてゐる。

(34)「……参らせよとて候ひし」とて、櫛を蒔きたる大なる文箱一つあり。御文と覚しきものあり。鳥の跡のやうにて、文字形もなし。(三四五、六頁)

有明の遺言を稚児が持つて来たところであるが、前々条に指摘した柏木の文を、紫式部は、

言の葉、続きもなう、あやしき鳥の跡のやうにて(柏木)

と描写してゐる。

(35)今日明日ばかりの年の暮につけても、「年もわが身も」と、いと悲し。(三四七頁)

有明の死に沈んでゐる作者の、その年の暮の述懐で、紫上の死んだ年の暮の源氏の詠、

物思ふと過ぐる月日も知らぬ間に、年もわが世も今日や尽きぬる(幻)

を引いてゐると見られる。その年に失った愛する者を年末にしみる追慕するといふ構想を生かすべく用ゐた引歌で

ある。

〔卷 四〕

⑥(a)……一人思ひ一人歎く涙をも乾す使りにやと、都の外まで尋ね来しに、世の憂きことは忍び来にけりと悲しくて、……(三七八頁)

江の島の宿で、月を眺め猿の声を聞いて、改めて「心中の物悲しさ」を味った折の語で、次田氏(朝日古典頭注)の指摘される通り、

鳥の音も聞えぬ里と思ひしを世の憂きことは尋ね来にけり(総角、薫と清い交際のみを望む大君が、薫と唱和した歌)

によってゐるであらう。なほ、右の引用のすぐ前に、(b)「夜の雲収まり尽きぬれば、月も行く方なきにや、空澄みのぼりて、まことに千里の外まで尋ね来にけりと覚ゆるに」とあるのも、直接には、「和漢朗詠集」の展郢と白樂天との詩句から取ったに違ひないが、場面が海岸でもあり、「源氏」(須磨)の一節も、恐らく作者の念頭にはあったであらう。更に付言すれば、これは本文によると、三月二十日過ぎのことで、実際には果して月が冴え渡ったか

どうか疑はしい。少くとも、和歌などの本意的な考へからすれば、この時の月は「おぼろに霞みて」とでもある方が順当であらう。それを作者が敢へて「空澄みのぼりて」と記したのは、朗詠の二つの詩句を引き、或いは「源氏」(須磨)をも思ひ浮べてそれらの情景をこゝに重ね合せた結果、さう描写せざるを得なくなったものであって、この作品の虚構乃至は方法の一端が、こゝにも現れてゐると言つてよい。

⑦……今宵は十五夜なりけり。雲の上の御遊びも思ひやらるゝに、御形見の御衣は、……「今こゝにあり」とは覚えねども、鳳闕の雲の上忘れ奉らざれば、余香をば拝する志も深きに交らずぞ覚えし。(三九二頁)

浅草の観音堂に詣でた折の文であるが、「源氏」(須磨)の有名な箇所を踏まへてゐることは、言ふまでもない。八月十五夜の月と、かつて自身も宮中に出仕してゐたことと、それにその頃院から御衣を賜った思出と、この三つの素材から、作者は「源氏」(須磨)のモチーフを取入れたのである。

〔巻五〕

(38)こゝは須磨の浦と聞けば、^a行平の中納言藻垂れつゝ^bわ
びける住まひも、いづくの程にかと、吹き越す風にも聞
はまほし。……千声万声の砧の音は、夜寒の里に音づれ
て、^a波の枕をそばだてて、^b聞かも悲しき頃なり。明石の
浦の朝霧に島隠れ行く船どもも、いかなる方へとあはれ
なる。光源氏の月毛の駒にかちけん心の中まで、残る
方なく推し量られて、とかく漕ぎ行く程に、……(四二
一頁)

巻五の冒頭、安芸の厳島に赴く途中、須磨の浦を通つた
折の文である。言ふまでもなく、「古今集」の歌や白楽天
の詩と共に、「源氏」の(a)「須磨」・(b)「明石」の一節や
その引歌を踏まへてをり、紀行文の常套手段ではあるが、
作者がいかに強く「源氏」を意識してゐるかを、知ること
ができる。

(39)父の大納言身まかりしことも、秋の露に争ひ侍りき。
かゝる御あはれも、又秋の霧と立ち上らせ給ひしかば、
^aなべて雲井もあはれにて、^b雨とやなり給ひけん、雲とや
なり給ひけん、いとおぼつかなき御旅なりしか。

いづ方の雲路ぞとだに尋ね行くなど幻のなき世なる
らん(四四二頁)

後深草院の四十九日に当って、亡き院を追慕するところ
であるが、地の文は、(38)と同じく、(a)源氏が葵上を追懐し
た歌「のぼりぬる煙はそれと……」(葵)及び(b)独白「雨と
なり雲とやなりにけん、今は知らず」(同、もとは「文選」
の「高唐賦」などに見える句)を受け、(c)歌は、桐壺帝の
有名な歌「尋ね行く幻もがな……」(桐壺)を本歌として
ゐる。因みに、「雨となり雲とやなりにけん……」の類句
は、同じ「葵」の歌に二度(三位中将の「雨となり時雨
ゝ空の……」と源氏の「見し人の雨となりにし……」)も
見えるが、作者の曾祖父通親が高倉院を悼んだ「高倉院升
遐記」にも、「雲となり雨とやならせ給ひぬらん」とあつ
て、「葵」のこの部分は亡き人を追慕する際にしば発想・
表現の典型とされたと云へる。

(40)……殊更残し持ち参らせたりつる御衣、いつまでかは
と思ひ参らせて、……那智の御山に皆納めつつ帰り侍り
しに、
夢覚むる枕に残る有明に涙ともなふ滝の音かな(四五

【第一表】

卷	番号	所出頁	場	面	各巻頁數	各巻平均度
二	11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1	一九八 二二三 二二八 二二二、三 二二六 二二七 二三一 二三六 二四一 二四五 二四九	院に連れられて御所へ行く折の不安な感情 父臨終の折の院の語 亡父の墓に詣でる乳父の語 曙の文 曙との密会の叙景 曙との密会の叙景 院からの後朝の文 曙との密会の叙景 曙との間の子を生むところ 東二条院との確執の条 前齋宮の描写	I II III IV	七 一	約六・五頁に 一箇所
二	21 20 19 18 17 16 15 14 13 12	二七〇 二七三 二七六 二七八 二八〇 二八六 二八七 二八九 三一 三一三	両院の蹴鞠の会の折の院の語 有明が迫る折の語 「扇の女」の扇紙の句 院の描写 院に待たされ忘れられた傾城の文 院の負態の案 " " 折の実兼の立立ち 再度の負態の条 近衛大殿に取籠められる条 同右	I II III IV	五 四	五・四頁に 一箇所

(備考) 頁は朝日古典本による。

五			四		三														
40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	
四五二〇三	四四二	四二一	三九二	三七八	三四七	三四五	三四四	三四三	三四二	三三九	三三八	三三七	三三六	三三五	三三一	三二七	三二一	三一四	
院の形見を手放す時の歌 (iii)	須磨の叙景 院の四十九日の感想 (ii)	須磨の叙景 院の四十九日の感想 院の形見を手放す時の歌 (iii)	江の島の叙景 浅草の "	江の島の叙景 浅草の "	有明を追慕しての感想	有明の遺言	有明の死を聞いての感想	有明からの文	有明の語	有明との関係についての院の語	有明の行状の評	有明との関係についての院の語	有明の語	有明の語	有明の語	有明の語	有明の語	有明の語	有明の語
四〇	四八	四八	四八	四八	五九														
一箇所に三頁	二四頁に一箇所に	二四頁に一箇所に	二四頁に一箇所に	二四頁に一箇所に	約四・二頁に一箇所に														

宿願の五部の大乘経の書写奉納を完遂して、熊野に詣れた作者が、院の形見の小袖三枚の中、残った一枚を手放す時の歌であるが、(18)にも引かれた「源氏」(若紫)の歌を本歌としてゐる。

三

以上が、「源氏」に影響を受けてゐる「とはすがたり」の部分として、現在筆者の気づいてゐる全部である。しかしこれで尽きてゐるとは到底思へないのであつて、精しく読んで行けば、恐らくまだかなりの箇所を補ふことができ得であらう。しかし、これだけでも影響の受け方の趨勢を掴むことはでき、又その型も一応出揃つてゐるかと思ふので、以下その点について若干の考察を加へておきたい。

第一に、「とはすがたり」全体を平均して七頁に一つ以上といふ「源氏」からの影響箇所も、調べてみるといくつか集中的に現れてゐるところがある。その点を見るために、以上の四十箇所を改めて要約表示すれば、右のやうになる(第一表)。

この表で明かなやうに、「源氏」の影響箇所は、卷三までの前半(いはば日記篇)に多く、卷四・五の後半(いはゆる紀行篇)には格段に少い。これは、前・後半の成立時期や執筆意識とも関係するかも知れず、その点は今後一層の検討に俟たねばならないが、少くとも本作のいはゆる紀行篇は、東海道では佐夜中山や宇津山に一言も触れないなど、普通の紀行とは多少様相を異にする面がある。

右の表に戻つて、「源氏」を引き或いは踏まへた箇所の現れ方を見ると、前述の通りいくつか連続して現れるところのあることが分る。その中、かなりはっきりしてゐるものを中括弧で、やゝ離れてゐて連続してゐるとは言ひにくいだが、作者の意識には脈絡の推測されるものを丸括弧で、それ／＼括つておいた。

この表に現れた箇所の意味については、後に改めて考へるが、大まかに云へば、各場面で「源氏」を摂取してゐるのは、概ね一種の虚構である。そこで、その虚構はどういふ場面に著しく見られるかといふと、次の二つの場合があると言へよう。

一つは、作者がその場面の外にゐて、登場人物なり場面なりの優美・優雅な点を描写してゐる、或いはむしろそれに優美・優雅さを与へてゐるところで、連続する箇所では

はⅡ(14)Ⅲ(16)、Ⅲ(17)Ⅳ(19)、単独ではⅣ(12)それにや、特殊な(28)などがこれに当る。もう一つは、作者が自身をその場面の主人公もしくは主要人物の一人としてをり、そしてその部分が本作の構想や作者の運命を大きく支配してゐるところで、右の表の大半がこれであるが、特に著しいのは、有明との関係の大話とも云ふべきⅦ(29)Ⅲ(35)であり、Ⅴ(23)Ⅳ(24)とⅢも、その線上にある。それと対比して、曙との関係の深まりを示すⅠ(4)Ⅲ(6)とⅠ(8)Ⅲ(9)や、院との関係を示すⅠ(7)及びⅢ(39)Ⅳ(40)、或いは他の男性との交渉を示すⅣ(20)Ⅳ(21)Ⅲ(26)Ⅳ(27)などが挙げられる。抒情的な叙景や一種の文飾とも言ふべき(25)Ⅲ(37)Ⅲ(38)及び(22)は、それらとは少し違ふが、作者が自らを主人公に仕立てて、そこに一つの環境設定を試みてゐる点で、やはりそれらと同列に考へてよいであらう。要するに、以上二つのいづれかを意図した場合に、作者は好んで「源氏」を利用したと言へる。

四

次に、前掲の四十箇所について、影響の受け方の型を考へ、それらを分類してみたいと思ふ。影響の受け方の型も

しくは種類と言つても、大要に微妙でむつかしいが、筆者は大胆に、(一)「源氏」の一場面を、故事として引用・言及したものを、(二)表現・発想の型を「源氏」に借りたもの、(三)部分的な構想やモチーフを「源氏」に負つてゐるもの、(四)かなり全体の構想や主題に「源氏」の影響を受けてゐるもの、の四段階に区分してみた。その具体例は、前稿をも参照されたい。勿論、(一)Ⅲの各々の境界もむつかしい、個々の箇所を右のどれと認めるかも、時には甚だ困難なことである。従つて、これはあくまで一つの試みであるが、一応この方法によつて、さきの四十箇所を分類表示してみよう(第二表)。右に、「源氏」を踏まへてゐるか否か多少疑はしいとした箇所も、一応入れておいた。

前述の通り(一)Ⅲの区分配当には若干の問題があるにしても、最下段の数字は多少の意味を持つであらう。「とはずがたり」に最もよく引かれてゐるのが「須臾」で群を抜き、「葵」・「柏木」・「桐壺」・「帚木」・「夕顔」がそれに次いでゐる。続いて「若紫」・「浮舟」・「若菜上」・「絵角」といった巻である。

これは、中世の他の作品、特に物語における「源氏」の影響と、さほど違はないであらう。尤も、この表に出ない「橋姫」(冒頭の文や薫の垣間見など)や、この表に巻の

【第二表】

明石	須磨	賢木	葵	花宴	若紫	夕顔	空蟬	帚木	桐壺	卷型
38-b	(14) 38-a ₁				(18)	5-a				(一) 故事としての言及引用など
	3 (10) (24) (27) 36-b 37 38-a ₂ 38-a ₃	(16-a)	9 33-a 33-b (39-a) 39-b	20	13 (40)	(7) 21-a		1-c 29-a 29-c 30-a	29-b 30-b 30-c (39-c)	(二) 発想表現の型を借用
	(1-a) (一)や(二)や(三)や(四)と(五)と(六)と(七)と(八)と(九)と(十)と(十一)と(十二)と(十三)と(十四)と(十五)と(十六)と(十七)と(十八)と(十九)と(二十)と(二十一)と(二十二)と(二十三)と(二十四)と(二十五)と(二十六)と(二十七)と(二十八)と(二十九)と(三十)と(三十一)と(三十二)と(三十三)と(三十四)と(三十五)と(三十六)と(三十七)と(三十八)と(三十九)と(四十)と(四十一)と(四十二)と(四十三)と(四十四)と(四十五)と(四十六)と(四十七)と(四十八)と(四十九)と(五十)と(五十一)と(五十二)と(五十三)と(五十四)と(五十五)と(五十六)と(五十七)と(五十八)と(五十九)と(六十)と(六十一)と(六十二)と(六十三)と(六十四)と(六十五)と(六十六)と(六十七)と(六十八)と(六十九)と(七十)と(七十一)と(七十二)と(七十三)と(七十四)と(七十五)と(七十六)と(七十七)と(七十八)と(七十九)と(八十)と(八十一)と(八十二)と(八十三)と(八十四)と(八十五)と(八十六)と(八十七)と(八十八)と(八十九)と(九十)と(九十一)と(九十二)と(九十三)と(九十四)と(九十五)と(九十六)と(九十七)と(九十八)と(九十九)と(百)					1-b (一)や(二)や(三)や(四)と(五)と(六)と(七)と(八)と(九)と(十)と(十一)と(十二)と(十三)と(十四)と(十五)と(十六)と(十七)と(十八)と(十九)と(二十)と(二十一)と(二十二)と(二十三)と(二十四)と(二十五)と(二十六)と(二十七)と(二十八)と(二十九)と(三十)と(三十一)と(三十二)と(三十三)と(三十四)と(三十五)と(三十六)と(三十七)と(三十八)と(三十九)と(四十)と(四十一)と(四十二)と(四十三)と(四十四)と(四十五)と(四十六)と(四十七)と(四十八)と(四十九)と(五十)と(五十一)と(五十二)と(五十三)と(五十四)と(五十五)と(五十六)と(五十七)と(五十八)と(五十九)と(六十)と(六十一)と(六十二)と(六十三)と(六十四)と(六十五)と(六十六)と(六十七)と(六十八)と(六十九)と(七十)と(七十一)と(七十二)と(七十三)と(七十四)と(七十五)と(七十六)と(七十七)と(七十八)と(七十九)と(八十)と(八十一)と(八十二)と(八十三)と(八十四)と(八十五)と(八十六)と(八十七)と(八十八)と(八十九)と(九十)と(九十一)と(九十二)と(九十三)と(九十四)と(九十五)と(九十六)と(九十七)と(九十八)と(九十九)と(百)	5-b 5-c			(三) 部分的構想やモチ 1フに影響
	22 (一)や(二)や(三)や(四)と(五)と(六)と(七)と(八)と(九)と(十)と(十一)と(十二)と(十三)と(十四)と(十五)と(十六)と(十七)と(十八)と(十九)と(二十)と(二十一)と(二十二)と(二十三)と(二十四)と(二十五)と(二十六)と(二十七)と(二十八)と(二十九)と(三十)と(三十一)と(三十二)と(三十三)と(三十四)と(三十五)と(三十六)と(三十七)と(三十八)と(三十九)と(四十)と(四十一)と(四十二)と(四十三)と(四十四)と(四十五)と(四十六)と(四十七)と(四十八)と(四十九)と(五十)と(五十一)と(五十二)と(五十三)と(五十四)と(五十五)と(五十六)と(五十七)と(五十八)と(五十九)と(六十)と(六十一)と(六十二)と(六十三)と(六十四)と(六十五)と(六十六)と(六十七)と(六十八)と(六十九)と(七十)と(七十一)と(七十二)と(七十三)と(七十四)と(七十五)と(七十六)と(七十七)と(七十八)と(七十九)と(八十)と(八十一)と(八十二)と(八十三)と(八十四)と(八十五)と(八十六)と(八十七)と(八十八)と(八十九)と(九十)と(九十一)と(九十二)と(九十三)と(九十四)と(九十五)と(九十六)と(九十七)と(九十八)と(九十九)と(百)									(四) かなり構想主題に 影響
1	14	1	5	1	3	4	2	4	4	計

(備考) 番号を括弧に入れたのは引歌又は本歌取の箇所。

計	五十四帖	浮舟	総角	椎本	匂宮	幻	柏木	若菜下	若菜上	藤裏葉	胡蝶	野分	少女	權
一一	28							19	21-p (省くも可) 26	12 (三)にも亘るか)	17 (二)や(三)とも言へる)			
三九		(2) (16-b)	8 (36-a)		15	35 (三)とも言へる)	23 31 34					11	6	8
六							32-a (32-b)							
五		(4)		25-c										
六一	1	3	2	1	1	1	5	1	2	1	1	1	1	1

名は出るが内容的に入らぬ。「若紫」(北山での小紫垣の垣間見や尼と少女の設定)や「若菜上」(蹴鞠の条)なども、そこには出るであらうが、それらとこの表で上位を占めた巻々とは、特にその特定の場面や歌が、中世にかなり愛誦されたことは、明言できる。そのことは、「無名草子」の評や「源氏こゝろくらべ」に見ても明かであり、心敬の場合についてよく似た調査をされた湯浅清氏の論攷(『心敬と源氏物語』、『和歌山大学学芸学部紀要人文科学』第十三号、昭三八・一二)においても、「桐壺から明石までと、宇治十帖の総角・浮舟とから比較的多く本説を得ている」ことが明らかにされてゐる。

そこで、それらの巻々を主に、その投取法を考へながら右の表を見ると、「とはずがたり」乃至は中世文学(特に物語類)が好んで取った「源氏」の巻や箇所には、特徴的な二つの傾向・種類のあることが分る。一つは、明るく華やかに美しいところ、一つは暗く憂愁をたゞへて沈んだところである。源氏と朧月夜尚侍との情事(花宴)や六条院の女楽(若菜下)は前者と言へようし、薫の垣間見(橋姫)も、かなりこの色調である。それに対して、桐壺帝が亡き更衣を追慕するところ、夕顔や葵上の死と源氏の悲歎、須磨明石の流浪、或いは浮舟の運命などは、後者に属

する。この分け方は多少素朴乱暴であるが、いづれにしても「源氏」において印象的な部分に違ひなく、中世の作者が「源氏」から構想や表現を借り或いは「源氏」の面影を二重写しにするのは、右のどちらかの気分を出す効果を意図したものと考られる。さう思つて物語や和歌における「源氏」の影響箇所を見ると、各箇所「源氏」に倚りかかることの必然性や意味が、かなりはっきりすると思ふ。

例へば、「平家物語」(巻五)の「月見」には、

……名所の月を見んとて、或いは源氏の大將の昔の跡をしのびつゝ、須磨より明石の浦伝ひ、……

といふ文(前記分類の(一)に入る)や、「橋姫」の薫の垣間見の条を引いた条(同じく(一)に入る)が引かれてゐて有名である。「平家」の作者があそこにさうした手法を試みたのは、あの章を美化しあの場面の雰囲気や盛上げるために他ならない。大体、「月見」の章自体が、「平家」の中では「あはれ」に優雅な章である。そこへ「須磨」「明石」(当然「花宴」をも思ひ出させる)や「橋姫」の場面をバックに置いて、一層の優雅さを加へてゐるのである。

「とはずがたり」における六条院の女楽についても、事情は大差ない。尤も、この場合は、作者の体験してゐる宮廷での事実を素材としてゐるのであって、素材自体が「源

氏」に影響され、むしろ模倣してゐるのであるが、そのことは前に触れた。当時の宮廷が、「源氏」のこのやうな明るい場面に憧れたと言つてもよい。

かういふ明るく華やかな場面を取入れてゐるのは、和歌も同じである。そこには当然、「艶」に「あはれ」な情緒が汲み取られ、さういふ箇所は恋歌の詠作にも重要な影響源となつたのであつた。俊成が、

源氏見ざる歌詠みは遺恨の事なり。(一六八番歌合)
と唱へるに當つて、

花宴の巻は殊に優、あるものなり。(異本には、「艶なる」・「えんある」などとある)

と前置してゐるのも注意すべく(この点は、先般久保田淳氏が「和歌への再生——源氏物語と中古・中世の和歌——」(『国文学』昭四二・一二)に言及された)、時代は下るが、心が

ふるまひの艶に詞の氣高きは「源氏」・「狭衣」なり。
(「さゝめごと」)

と言つてゐるのも、多分にこの意味であらう。

しかしながら、前掲の表に示した「とはすがたり」の場合においても、或いは中世の他の作品に見ても、かういふ艶に華やかな場面を取つたものは、好んで取られた「若

紫」の例の垣間見を除けば、さほど多くない。しかも、「若紫」の場合とて、少女紫上の姿にひそかに思ひ焦れる藤壺の面影を見る源氏の胸中は、決して周囲の風景と同じく明るいとは言へない上に、実際には中世の物語作者の構想力の貧困から、毎度モチーフを借りたといふ感が強いのであつて、実は前述の第一の傾向とは言ひがたいのである。

そこで再び前述の二傾向に戻つて、淋しく沈んだところの影響を見ると、これはかなり多い。とりわけ、「須磨」における源氏の悲痛な境遇や、「夕顔」のはかなさ、「浮舟」の不安などが、中世の作者に構想やモチーフのヒントを与へたと思はれることは、「とはすがたり」について上述べた通りである。「須磨」の場合は、「とはすがたり」もさうであるが、舞台が都を離れた景勝の地である故もあつて、紀行的な文章もよく引いてゐる(例へば、「太平記」巻四・先帝遷幸事)が、一方で「増鏡」(新島守)の隠岐の配所が須磨のわび住まひに重ね合はされてゐるやうに、構想にかゝつたり、或いは右は挙げた(2)のやうに、或る程度作者の主題を支へるやうに用ゐられたりした例も少くないのである。「夕顔」・「浮舟」が一つの理想像乃至は人物の一典型とされてきたことは、「更級日記」作者の素

朴な読み方にも見えてゐる通りであるが、中世（特に擬古物語）においては、生の不安や苦悩を描く一つの型として時には安易に模倣もされたのであった。

五

それでは当時、どうしてこのやうな場面や人物が、「源氏」の中でも特に注目されて共感もしくは関心を与へられたのであらうか。その答へは簡単である。第一に、「源氏」の中で一読忘れがたい感動的・印象的な場面や人物だからである。言ってみれば、当時の人々の「源氏」の読み方が、素朴でもあり素直でもあったのである。けれどもそこには、やはり中世の現実の反映もあると見たい。

中世の作者にとって、現実を決して明るくなかった。従つて、彼等の描く人生即ち文学は、概ね暗く陰鬱な色調に傾かざるを得なかつた。言葉を換へて言へば、主人公は多くの場合、氣力に乏しく、しばしば泣きながら運命に流されて行くのであつて、この点では、「とはすがたり」は例外に近い。さういふ人物を描かうとして、しかも構想力の乏しい作者が、先行作品とりわけ「源氏」から出来上つた一つの人物や場面を移して来るといふのは、至極当然であ

らう。

さうした中であつて、いさゝかでも華やかに明るい色調を導入しようとするれば、これは又、現実になんか見出しがたい故に、古典の世界から拾つて来るといふことになる。少くとも和歌や連歌における「源氏」の摂取には、かうした側面が考へられると思ふのである。

かう見て来ると、中世の作者が「源氏」に影響をされたそのされ方は、正しく中世的であつたと言ふことができよう。そしてその点で、「とはすがたり」は、一つの（擬古物語には、本作とはや、傾向の異なる影響も見られる）際立つた作品であると思ふのである。

（追記）本稿を成して後、関連する二つの論攷が目に入った。一つは、鈴木儀一氏「とはすがたり」二条の教養―引歌をめぐつて―（『駒沢国文』第六号、昭四三・三）で、「とはすがたり」の引歌とされてゐる万葉・古今・源氏その他及び西行の歌を調べ出したもの、もう一つは、町田綾子氏「とはすがたり」の構想について―『源氏物語』との比較研究―（『立教大学日本文学』第二十号、昭四三・六）で、「とはすがたり」の全体的構想と部分的構想とにおける「源氏」の影響を指摘考察したものである。共に中間報告の感はあるが、殊に町田氏のはよく調べてあり、結論においても、前稿及び本稿に述べた筆者の考へと一致するところが多く、興味深かつた。

―昭四三・七・一四―